

はけの緑とわき水をまもる活動

野川ほたる村

代 表 小 西 正 泰

はじめに

大岡昇平の作品『武蔵野夫人』で知られる「はけ」（国分寺崖線）のふもとのあちこちから、清水がわき出てせせらぎをつくる。それらが集まって「野川」（全長22キロメートル）となり、西へ流れて多摩川にそそぐ。

野川をはさんで、都立野川公園（小金井・三鷹・調布の3市にまたがる。約40ヘクタール）が広がる。この公園内のわき水の小流にゲンジボタルを復活させようと、1986年6月、地域住民を主体に「野川ほたる村」（現在「村民」百余名）が誕生した。この「村」は、ゲンジボタルの自然発生（人為によらずに生物が発生すること）をゆたかな自然環境のシンボルとして、はけの緑とわき水をまもることを目的としている。

それには、まず園内の「ほたるの里」に発生させ、これを^{てこ}挺子にして自然保護の連帯の輪を野川流域に広げていこうという構想である。

1988年6月12日、野川公園の湧泉群とその流れをふくむ「自然観察園」（約5ヘクタール）が開園され、そのなかに「ほたるの里」も設けられた。同時に野川をへだてた対岸に「自然観察センター」も開設された。それで、この年を「ほたる元年」と位置づけ、当日前後からの活動について概要を報告することにした。

1. 班活動

(1) ほたる班

「ほたるの里」からゲンジボタルが発生するまでのあいだ、有志がホタルの幼虫とその餌になるカワニナ（巻貝）を自宅の水槽で飼育し、成熟した幼虫を翌春（3月下旬～4月上旬）ほたるの里に放流している。これをホタルの「里親制度」と呼ぶ。ちなみに、ゲンジボタルの1世代は通常1年間（6月産卵～翌年6月羽化）であるが、ときに2年を要するものもある。

ほたる班では、そのほか次のことをおこなった。

- ① 「カワニナ飼育マニュアル」 No.1～3の作成、配布
- ② 「ゲンジボタル飼育マニュアル」 No.1～4の作成、配布
- ③ カワニナとゲンジボタル自然生息地（近郊数カ所）の現地調査
- ④ 小金井市公民館東分館で大型水槽にカワニナとホタル幼虫を飼育して展示

(2) 植物班

- ① 自然観察園内への山野草の植栽およびその管理
- ② T氏邸の植生、わき水の調査

小金井市内に残されている貴重なはけの緑とわき水の保全対策に資するため、T氏邸（中町4丁目、約5,200平方メートル）内の樹木（中木以上）の種類、本数、湧水量、水質などを調査した。

樹種：常緑樹23種、落葉樹22種

水量：30～90リットル／分（通年）

水質：pH 6.6、COD 0～5ppm、水温16.1℃など

(3) 編集部

機関誌『はたる村だより』No.3（1988年6月）、No.4（1989年2月）、No.5（1989年10月）を編集、発行した。

2. 定例会議

偶数月に月例会を、6月に通常総会を開催している。月例会では主として各班の活動状況および計画などについて報告し、総会では向こう1年間の活動方針の決定、役員の選出、その他重要事項の決議などをおこなっている。

3. 公開レクチュア

定例会議時に原則として公開レクチュアを併催し、自然保護思想の普及をはかっている（於 自然観察センター）。

1988年6月 矢島 稔（多摩動物公園園長）：ホタルの話（スライド使用）

鏑山英次（東京新聞写真部長）：野川の四季（スライド使用）

8月 大場信義（横須賀市自然博物館）：ホタルについて

10月 筒井迪夫（東京大学名誉教授）：都市のみどりについて

- 1989年 2月 大歳 寛 (TDK会長) : ホタルを飼育して
4月 永松典子 (井戸端議会小金井) : 野川公園春景色
6月 小西正泰 (野川はたる村村長) : 昆虫のはなし
鏑山英次 (前出) : 野川の四季 (スライド使用)
佐野 匡 (はたる班指導者) : ホタルについて (スライド使用)
8月 小西正泰 (前出) : 野川公園の水生動物 (観察会とレクチュア)
10月 広井敏男 (東京経済大学教授) : 身近な自然を守る意義について
12月 清水徹男 (小金井自然観察会代表) : 冬鳥の観察 (観察会とレクチュア、スライド使用)

4. イベント

(1) 野川はたるまつり

第2回 (東京都西部公園緑地事務所と共催)

1988年6月12日、自然観察園および自然観察センターのオープニングにちなみ、同時開催した。

- 昼の部 1) 公開レクチュア 2題 (前出)
2) 児童音楽劇「ホタルの一生」
3) 小池玲山 (作曲) 「蛍」 (尺八・琴)
4) リコーダー演奏
5) わき水野点、わき水コーヒー
6) 「野川はたるまつり宣言」

宣言文：「緑とわき水が豊かだったころ、ホタルは私達に夢と心のやすらぎを与えてくれた。幽玄な炎は生命の証^{あかし}であり、古くから日本人の心のあり方とかかわってきた。

地球の歴史をみると、私達はわずかな時間の間に、その証を失おうとしている。「野川はたる村」は、ホタルを再び呼び戻そうとの願いを込め、野川公園の“はたるの里”にこの灯をともした。

ホタルの灯は、ハケの緑と野川の清流復活のシンボルであり、私達は、21世紀へ向けてこの灯を強くかかげていくことを宣言する。」

夜の部 7)ホタル観賞会（6月12、13、14日）

参加者数約2,000名

第3回 （都西部公園緑地事務所ほかと実行委員会を結成し開催）

1989年6月16、17、18日

昼の部（6月18日）

- 1)公開レクチュア 3題（前出）
- 2)影絵劇「まいごのホタル」
- 3)ホタル工作教室
- 4)クイズ「はたるピカピカ大学」
- 5)はたる句会（指導：樋口 清）
- 6)ホタルにちなむ植物の展示（自然観察センター）
- 7)わき水野点、わき水コーヒー

夜の部 8)ホタル観賞会（6月16、17、18日）

3日間とも雨にたたられたが、参加者約2,000名。はたる村より会場警備、説明に30名動員。

(2) 野川わき水まつり

地球上の生命のふるさとしての水にたいする認識を深め、その源泉をたいせつにまもるため、年1回「野川わき水まつり」を開催している。

第2回（「はけの緑とわき水を守るつどい」）

1988年11月6日、都西部公園緑地事務所ほか諸団体が参加しておこなわれた。

- 1)野川公園上流の小金井市内湧水地をたずねて散策
- 2)「わき水懇談会」を開催

第3回（後援：都西部公園緑地事務所、国分寺市、小金井市ほか諸団体）

1989年10月29日、国分寺市内湧水地を中心に開催した。晴天にめぐまれ参加者約80名。

- 1)国分寺市内の湧水群を散策。お鷹の道、真姿の池（「日本名水百選」の一つ）、国分寺境内など。
- 2)交流会（国分寺跡公園）
- 3)講演会（国分寺勤労福祉会館）

- ① 基調講演 広井敏男（東京経済大学教授）：身近な自然を守る意義について
- ② 提言 小西正泰（村長）：自然史博物館を国分寺市（鉄道学園跡地）に
- ③ レクチュア 浜野栄次（昆虫写真家）：国分寺のチョウ（スライド使用）
- ④ 参加団体の活動報告
- ⑤ 「野川わき水まつり宣言」

将来の展望

当面のターゲットは、「ほたるの里」にゲンジボタルを自然発生させることである。現状では、わき水が清すぎてカワニナの餌になる植物性プランクトン（珪藻など）が少ないこと、水温がやや低いことなどが主要なネックであろう。そのほか、ホタル発生地面積（狭い）、土手の高さ（低い）などの問題もある。これらについては、今後調査研究を続け、公園当局ともよく協議のうえ解決していきたいと思う。

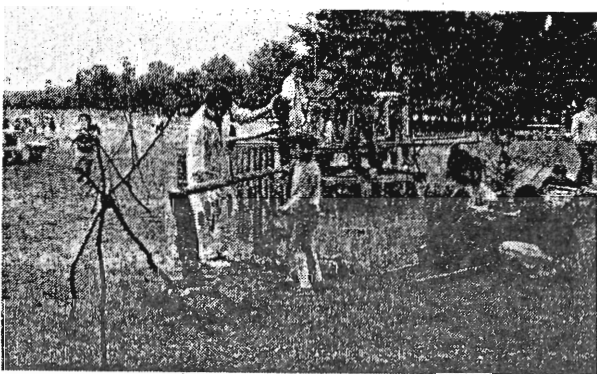
また、各種の活動をととして野川流域に自然保護の思想が根付き、さらにこれを拠点として広がることを期待している。

武蔵野台地の湧泉守ろう

三鷹で7、8の両日、初の野川わき水まつり

武蔵野船足の跡(おこ) 桑根樹のヒチナ(ウツギ) 湖を未来にリレーしていく。多摩川水・野川水
環状鉄道沿いのかつての市民クラブの水たがも、八の宮、三鷹川尻の新野川(が) 一宮野川で水を
を分す、小金井、三鷹各の三方所から採水を通じ、この水をお茶をなだり、わき水(湯)とシセザイバ
を組み合わせた顔や自然環境食などがあり、緑とわきをいづれも守っていくことの、わき水事業」をする。

演奏しみ観察会……



野川わき水まつりの準備を急ぐ若者たち—三鷹市で

ハヤが群を過境にて知ら
りなを至した。材料は
地にてたゝろが急な宅
隣の立ち枯れの木を用
まづは百年後二時、
まつの音とシシヤイサの
成城四丁目ある「胡の森
アサンブル」泉・野川・
つ池二ヶ所に繞つて
いる湧水も付樹のシチ
に見錯れられる。このため
伯耆の市街ループのたち
所から採水した水をほ

環境保全グループ準備

は傍聴席に降り参りて、舌を
また調製を進めおくり、十月
には、國内外の勞務總局を
守ると、マシナルラス
「武野の森」機關を進め
てゐると、野公園の角
に來年、博覧地を含め約
の自然公園に十一萬
三萬坪、自費設計ニ
いすも銀粉、をつり、
定している。

「野村をきままり」行
 團體にはほたるのほか
 雲風を以て小田正泰・
 野川はなと村と都立野
 小金井井田眞樹、井戸端
 小金井三多摩國政研
 究会など小金井を中心とす
 はホ多が乱闘、タノヲ
 きの保全に、市民の共助
 のかについて。

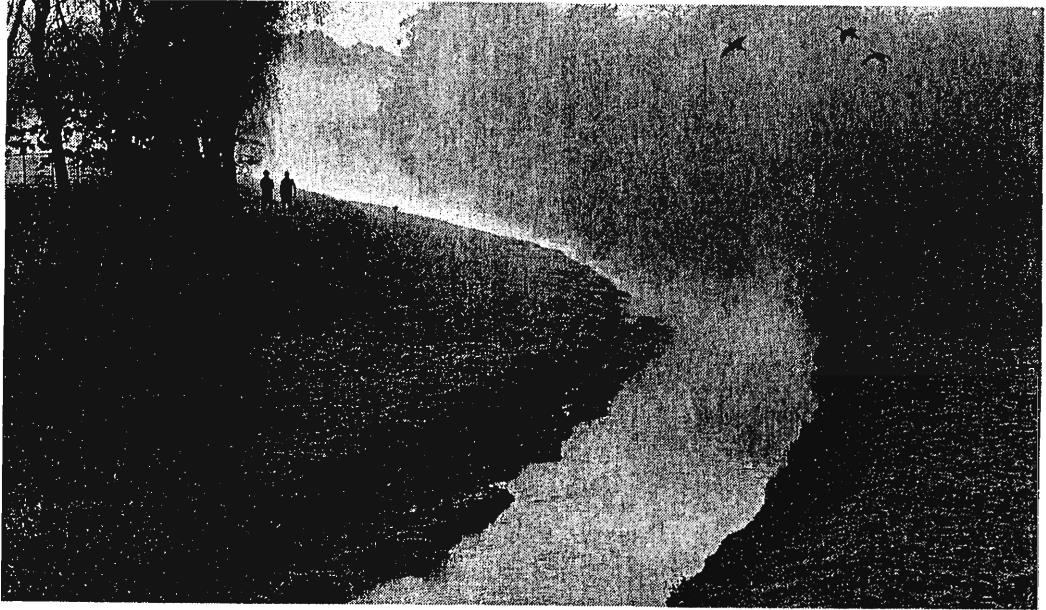
輪を広げようとする計画
した。

準備にはほたる村民や、
夫妻の知り合いで、芝居づくりに情熱を燃やしている岡市東町一ノ四三、山崎一さん(三〇)、音楽家の中野区弥生町一ノ二九、渡部浩司さん(三三)ら若者が協力、まつりのイベントに使う古木の薬園や、わき水を通ぬみしづく

りなぞをしてきた。材料は公
園内の立ち枯れの木を利用。
まづりは七日午後二時、わ
ぎ水の音とシンセイサイザ
ーの「泉・野川・そ
して海へ」が流れるなか、古
代人の衣装を纏った子供が三
所から採水したわぎ水をつづ

に入れて会場に通ひこみ、開
会宣言でオープン。開会前には
地元町会の人や都の関係者ら
も参加して、「ハケの縁と
水を守る」座談会を行う。会
場では野川の四季を写した写
真の展示、古木の葉摘遊び、
ホタル、カワニナ教室、地下
水保全の雨水貯留桶展示や
ビデオ放映、バザーなどを
定めている。

一般の参加呼びかけ



明 け ゆ く 野 川—三鷹市大沢で

泉

都会のオアシス

野川ほたる村村長 小西 正泰

この野川を流れて、都野川公園(小井・三鷹、調布市、四〇〇)がある。この公園の「自然観察園」内の湧水にホタルを観察させようと、昭和六十一年、地域住民を主として「野川ほたる村」(現世田谷区)が誕生した。この団体は、ホタルの自然環境をゆたかな自然環境のシンボルとして、ほたるの棲みかを守ることを目的としている。それには、手樹内の「ほたるの里」にゲンジボタルを繁殖させ、これを育てて自然環境の増進の輪を野川流域に広げていくというのである。

古来、人間の文化は水辺に発生し、河川に沿って伝播(でんぱ)してきた。私たちのホタル文化も、京から鎌倉、江戸に線が面へと拡大していくことを期待したい。ところで、公園内の湧水には、シマアメンボとフナシ、モンカゲロウが生息している。マウス郡市、東京の近郊に、清流にしか住まないこれらの昆虫を繁殖したときはいとおとがこみあげてきた。

初夏にはゲンジボタルの乱舞も加わって、これらの三天「ほたる祭」をはぐくむ、野川を中心としたゆたかな生態系が、自然に育った都会のひとのオアシスとなることを願っている。これを私の初志としたい。

(学習院大学講師・農学博士)



野川公園、自然観察園内にて 昆虫観察会（鏑山英次 撮影）
昭和63年 8 月



ゲンジボタルの幼虫（野川はたる村里親、佐野匡 撮影）
昭和63年 3 月



大場信義氏（左）と小西（村長）、はたるの里視察にて（鐺山英次 昭和63年 8 月撮影）



ゲンジボタルの幼虫放流、自然観察園ホタルの里にて（鐺山英次 平成元年 4 月撮影）